

研 修 機 関	社会福祉法人 相生会 あかしあ荘
研 修 期 間	平成17年10月3日～11月25日
所 属 ・ 氏 名	かほく市立外日角小学校 岸 洋平

I 研修目的

- ・福祉施設でいろいろな業務を体験し、職員や利用者など多くの人と関わり合う中で、視野を広げ、人間性や社会性を磨き、自身の資質向上を図る。
- ・老人介護支援事業を通して、利用者が幸せに安心して過ごせるように努力している企業姿勢やそのための具体的な方法を学び、学校での児童理解や接し方に生かす。
- ・老人福祉の問題に対して今までとは違った視点で学び、今後の学校での学習活動に生かす。

II 研修内容

1 デイサービスセンターでの研修

あかしあ荘デイサービスセンター (10月 3日～10月 7日)

かほく市宇ノ気デイサービスセンター (10月11日～10月14日)

かほく市七塚デイサービスセンター (10月17日～10月21日)

- ①準備時間 おしぼりの準備、洗濯物たたみと仕分け、歩行器の準備、貼り絵用の材料準備
- ②送迎時間 自動車・施設への誘導、手荷物の確認、利用者自宅でのベットへの移乗
- ③出迎え時 お茶出し、健康調べの補助
- ④入浴時間 お風呂への誘導、衣類の着脱介助、入浴介助、ドライヤーでの整髪、風呂場の掃除・消毒
- ⑤食事時間 利用者の手の消毒、テーブル拭き、食事の準備、後かたづけ、残量の記録、おやつ準備と後かたづけ
- ⑥昼寝時間 布団・ベットの準備、ベットへの誘導
- ⑦レクリエーション あかしあ荘・・・今月の歌・漢字クイズ・カラオケ・風船バレーの補助
宇ノ気・・・津幡町森林公園への遠足(緑の広場での散策補助、施設内でのおやつ準備)及び貼り絵や塗り絵など作品作りの補助
七塚・・・ボーリング大会・貼り絵や手芸など作品作りの補助
- ⑧送迎後 施設の掃除・消毒、明日の打ち合わせ
- ⑨その他 声かけ、見守り、会話、爪切り、髭剃り

2 特別養護老人ホームあかしあ荘での研修 (10月24日～11月25日)

- ①湯茶配り、エプロン等の準備、食事の配膳、食事介助
- ②トイレへの誘導、排泄介助
- ③お風呂への誘導、衣類の着脱介助、ドライヤーでの整髪
- ④シーツ交換、爪切り、髭剃り、口腔ケアの補助
- ⑤レクリエーション、散歩への誘導、行事への参加(県社会福祉協議会余技展の見学、小学生慰問時の補助、音楽交流会の補助)
- ⑥声かけ、会話、見守り

Ⅲ 研修成果

1 職員や利用者との関わりの中で

研修先の特別養護老人ホームは4つのフロアーに分かれており、それぞれのフロアーに25人のお年寄りが入居している。私はその中のコスモスと呼ばれるフロアーで研修を行った。私の当初のめあては「笑顔でお年寄りと接すること」であった。しかし、研修が進むに連れて笑顔は失われていった。それはデイサービスのお年寄りと比べて介護度の高いお年寄りが多いため会話が通じなかったり、食事や排泄の介助でなかなか言うことをきいてくれなかったりといった精神的なストレスがたまってきたからである。しかし、職員のみなさんの様子を見ると、いつも笑顔で優しく対応されており、それができない自分にますます不甲斐なさを感じた。そんなある日、お年寄りに飲ませるお茶にとろみをつけていると、職員の方からとろみを飲んでみるように勧められた。見た目はおいしそうに思えたがいざ飲んでみると、決しておいしいものではなかった。これではお年寄りがいやがるのも無理はないと思った。水分補給のためとはいえ、そんなことも知らずにとろみのお茶を飲ませていた自分が恥ずかしくなった。また、その職員の方はお年寄りが使用するおむつを自分ではき、排泄体験も行ったことを話して下さった。介護される相手の立場のことを考えて接することができるのもこのような体験があるからなのだと思います。さらに、どのお年寄りのことを尋ねても昔の仕事のことや家族のこと、デイサービスに通っていた時のことまで詳しく答えて下さった。その時の話をされた方の目が、まるで自分の家族の話をするかのように優しくかったことを今でも覚えている。お年寄りに向けられた笑顔はつくられた笑顔でなく、入居者一人一人のことを知っているが故に出せる自然な笑顔であったことに気づかされた。

研修先では私以外にも福祉専門学校や看護大学の講師の方が研修にみえていた。講師の方はたった一日の研修であったが、お年寄りの状態を手際よくつかみ適切な介護をされていた。その中で一番印象に残ったことは、お年寄りに対する言葉づかいである。声をかけるときは常に相手の目線に立ち、敬語を使って話しかけていた。経験を積み重ねた人生の先輩として尊敬を持って接している姿を見ることができた。知らず知らずのうちにお年寄りと対等の関係のように話をし、親しみを込めて話していたと錯覚していた自分を反省した。

お年寄りとの触れ合いの中でも感じさせられるところがあった。Sさんは今年91歳になった女性だが、話される内容はまだまだしっかりしている。とにかく負けず嫌いな性格で、風船バレーやカルタ取りでも張り切り、負けると悔しがる。そんな彼女が一番がんばっていたのがりハビリであった。今まで車イスの生活であったのが、指導員の方の勧めもあって歩行器で歩く練習を始めた。指導員がいないときでも自分の体調に合わせて訓練をしていた。私が研修を終えるころには車イス姿より歩行器姿の方が多く見られるようになった。90歳を越えても努力次第では運動機能が改善することに驚かされ、いくつになっても目標をもちあきらめずに努力することが大切なのだという事を改めて感じさせられた。

2 利用者の安全や幸せを願う企業姿勢から

職員の控え室には以下のような職員の基本的態度についての項目が貼りだしてある。

- ①心身にゆとりを持ち、常に笑顔を忘れない。
- ②常に公平・公正な態度で接する。
- ③利用者の尊厳保持と人格を尊重する。
- ④利用者の気持ちを大切にし、良い聞き手になる。
- ⑤敬意を持って接し、希望をかなえられるよう努力する。
- ⑥惰性的にならないように常に、反省を怠らない。
- ⑦プライバシーの尊重と調和について常に配慮する。
- ⑧利用者が組織する家族会の要望を積極的に取り入れる。

このように目につく場所に掲示してあることで、一日の仕事を終え、今日の自分の態度をふり返ることが自然にできるようになっていた。利用者に対するサービスがますます向上するようという企業努力をみることができた。

また、その横には職員の共通理解を図るための掲示版があり、指示伝達が行われていた。その中で特に目を引いたのは「ひやりはっと」の報告書であった。職員が利用者の介助をしていて危険であると思われた状況について、いつ、誰が、どこで、どうして、どうなった、どのような処置をしたといったことが詳しく書かれていた。例えば、利用者が昼寝の後に毛布をたたんでいて転倒しそうになるという場面があった。咄嗟のことで私は動けなかったが、職員があわてて駆け寄り体を支え大事に至らなかったことがあった。その後の「ひやりはっと」の報告書にはこのような場合は座ってたたむように声かけをする必要があると書かれていた。このように情報を共有することで、似たような危険を事前に防止する効果が期待できる。利用者の安全を守るための重要な手立てになっていると感じた。

3 学校とのかかわりの中で

特別養護老人ホームあかしあ荘を研修先に選んだのは、本校が毎年あかしあ荘を慰問に訪れているからである。私は昨年11月、5年生の児童を引率して初めてあかしあ荘を訪れた。施設では合唱を披露した後、学校で育てた菊の鉢と折り紙で飾り付けたカードをプレゼントした。ありがとうと何度もお礼を述べてくださる方や涙を浮かべながら手を合わせて下さった方がいる一方、何の反応もない方も大勢いた。自分が思い描いていたお年寄りの姿と大きくかけ離れていることに驚かされた。また、そのときの慰問のあり方がお年寄りや児童にとって有意義なものであったのかどうか疑問に感じた。そのような思いがある中、今回は慰問を受け入れる側からの視点で学校とのかかわりを考える機会にめぐり合うことができた。

デイサービスセンターにおいては、介護度の低い方が多いので、子どもたちと一緒にレクリエーションを楽しんだり、作品作りを行ったり、会話を楽しむことが十分に可能だと感じた。施設を利用しているお年寄りの多くは、一人ですごす時間が多く、子どもとのふれ合いを楽しみにしているとの話であった。児童にとっても自分たちが行った事に対して喜んでもらえるれば老人福祉の問題に積極的にかかわろうする態度も育ってくるであろう。

一方、老人ホームにおいては、介護度の高い方が多くいるため、一緒に活動できる方は限られてしまう。また、一人一人の状態に応じた接し方をしなくてはならない。そのため、事前の打ち合わせが重要であることはもちろん、何度か交流を重ねることにより関わり方が見えてくるように思われる。今年も、この研修中に本校の児童が慰問に訪れた。一週間前に子どもたちがやってくることをお年寄りに伝えると、その日から「今日来るがんかいね。」

「明日かいね。」と子どもたちの訪問を楽しみにしている様子が見られた。当日は昨年と同じような訪問の仕方であったが、入居者の半数の方が集まってくれた。「子どもの声を聞くだけでもうれしいがんや。」と話すお年寄りの声や、普段はあまり感情を表さない方が涙を流していた様子を見て、子どもたちが訪問すること自体に意義があることに改めて気づかされた。

IV 今後の課題

研修中に学校に寄る機会があり「表情が優しくなったよ」と同僚の教師に言われ複雑な心境になった。お年寄りと接する内に表情が軟らかくなってきたのだろうが、逆に学校で勤務していたときは表情が陰しかったのだろうと反省させられた。子どもたちを目の前にするとどうしてもこうあって欲しいという願いが先行してしまい、その思いが表情に出てしまっていたのだと思う。研修中は「まず、“YES”からの対話に心がけよう」ということをよく言われた。子どもに対しても同じで、今の姿を肯定的に捉え、笑顔で接することが増えるように心がけて

いきたい。

お年寄りと長い時間生活をしていて感じたことは、どんなに立派な施設でも、どんなに行き届いた看護を受けていても、お年寄りの心の中には家に帰りたい、家族と暮らしたい、という思いを強く持っているということである。しかし、それが許されない現状がある以上、地域のお年寄りを地域のみinnで支援していくという体制が必要なのではないかと感じた。これからも、子どもたちに老人福祉の問題に関わらせていきたいという思いを強くもった。どのような関わり方がどちらにとっても良い効果をもたらすのかを今後も考え実践していきたい。

老人介護の仕事を通して一番強く意識されたことは人の命を預かっているということだ。ちょっとした油断や誤った判断が事故に繋がりそれが寝たきり状態をつくったり命を奪ったりということにもなりかねない。この研修で学んだ利用者の安全を守ろうとする職員の意識やその対策について学校現場でも生かせるように努力していきたい。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった石川県教育委員会、学校長をはじめとする学校職員のみなさま、そして何よりもお忙しい中、何の資格も知識もない私を温かく迎えてくださった相生会あかしあ荘の職員のみなさま、入所者のみなさまに深く感謝申し上げます。